アグニの神

芥川龍之介

一

支那(シナ)の上海(シャンハイ)の或(ある)町です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度(インド)人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加(アメリカ)人と何か頻(しきり)に話し合っていました。

「実は今度もお婆さんに、占いを頼みに来たのだがね、――」

亜米利加人はそう言いながら、新しい巻煙草(まきたばこ)へ火をつけました。

「占いですか？　占いは当分見ないことにしましたよ」

婆さんは嘲（あざけ）るように、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げても、御礼さえ碌（ろく）にしない人が、多くなって来ましたからね」

「そりゃ勿論（もちろん）御礼をするよ」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗（ドル）の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取って置くさ。もしお婆さんの占いが当れば、その時は別に御礼をするから、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想（あいそ）がよくなりました。

「こんなに沢山頂いては、反（かえ）って御気の毒ですね。—

―そうして一体又あなたは、何を占ってくれろとおっしゃるんです？」

「私が見て貰いたいのは、――」

亜米利加人は煙草を啣えたなり、狡猾そうな微笑を浮べました。

「一体日米戦争はいつあるかということなんだ。それさえちゃんとわかっていれば、我々商人は忽ちの内に、大金儲けが出来るからね」

「じゃ明日いらっしゃい。それまでに占って置いて上げますから」

「そうか。じゃ間違いのないように、――」

印度人の婆さんは、得意そうに胸を反（そ）らせました。

「私の占いは五十年来、一度も外（はず）れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね」

亜米利加人が帰ってしまうと、婆さんは次の間（ま）の戸口へ行って、

「恵蓮（えれん）。恵蓮」と呼び立てました。

その声に応じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦労でもあるのか、この女の子の下（しも）ぶくれの頬（ほお）は、まるで蠟（ろう）のような色をしていました。

「何を愚図々々（ぐずぐず）しているんだえ？　ほんとうにお前位、

ずうずうしい女はありゃしないよ。きっと又台所で居睡りか何かしていたんだろう？」

恵蓮はいくら叱られても、じっと俯向いたまま黙っていました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺いを立てるんだからね、そのつもりでいるんだよ」

女の子はまっ黒な婆さんの顔へ、悲しそうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？　忘れちゃいけないよ」

印度人の婆さんは、脅すように指を挙げました。

「又お前がこの間のように、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺そうと思えば、雛(ひよ)っ仔(こ)の頸(くび)を絞めるより――」

こう言いかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、恵蓮はいつか窓際(まどぎわ)に行って、丁度明いていた硝子(ガラス)窓から、寂しい往来を眺(なが)めているのです。

「何を見ているんだえ？」

恵蓮は愈(いよいよ)色を失って、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、そう私を莫迦(ばか)にするんなら、まだお前

は痛い目に会い足りないんだろう」
婆さんは眼を怒（いか）らせながら、そこにあった箒（ほうき）をふり上げました。
丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩（たた）く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があります。それがどう思ったのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の

子を一目見ると、しばらくは呆気（あっけ）にとられたように、ぼんやり立ちすくんでしまいました。

そこへ又通りかかったのは、年をとった支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでいるか、お前は知っていないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりこう問いかけました。支那人は楫棒（かじぼう）を握ったまま、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？　あすこには、何とかいう印度人の婆さんが住んでいます」と、気味悪そうに返事をすると、匆々（そうそう）行きそうにするのです。

「まあ、待ってくれ。そうしてその婆さんは、何を商売にしているんだ？」

「占い者（しゃ）です。が、この近所の噂（うわさ）じゃ、何でも魔法さえ使うそうです。まあ、命が大事だったら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好（よ）いようですよ」

支那人の車夫が行ってしまってから、日本人は腕を組んで、何か考えているようでしたが、やがて決心でもついたのか、さっさとその家の中へはいって行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんの罵（ののし）る声に交った、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いか、一股（ひとまた）に二三段ずつ、薄暗い梯子（はしご）

を駈(か)け上りました。そうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはいって見ると、そこには印度人の婆さんがたった一人立っているばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見当りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑わしそうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占い者だろう？」

日本人は腕を組んだまま、婆さんの顔を睨(にら)み返しま

した。

「そうです」

「じゃ私の用なぞは、聞かなくてもわかっているじゃないか？　私も一つお前さんの占いを見て貰いにやって来たんだ」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益（ますます）疑わしそうに、日本人の容子（ようす）を窺（うかが）っていました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方（ゆくえ）知れずになった。それを一つ見て貰いたいんだが、――」

日本人は一句一句、力を入れて言うのです。

「私の主人は香港（ホンコン）の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子（たえこ）さんとおっしゃる。私は遠藤という書生だが――どうだね？　その御嬢さんはどこにいらっしゃる」

遠藤はこう言いながら、上衣（うわぎ）の隠しに手を入れると、一挺（ちょう）のピストルを引き出しました。

「この近所にいらっしゃりはしないか？　香港の警察署の調べた所じゃ、御嬢さんを攫（さら）ったのは、印度人らしいということだったが、――隠し立てをすると為（ため）にならんぞ」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖（こわ）がる気色（けしき）が見えません。見えないどころか唇（くちびる）には、反って人を莫迦

にしたような微笑さえ浮べているのです。

「お前さんは何を言うんだえ？　私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありゃしないよ」

「嘘をつけ。今その窓から外を見ていたのは、確に御嬢さんの妙子さんだ」

遠藤は片手にピストルを握ったまま、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにいる支那人をつれて来い」

「あれは私の貰い子だよ」

婆さんはやはり嘲るように、にやにや独り笑ってい

るのです。

「貰い子か貰い子でないか、一目見りゃわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行って見る」

遠藤が次の間へ踏みこもうとすると、咄嗟(とっさ)に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞(ふさ)がりました。

「ここは私の家(うち)だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはいられてたまるものか」

「退(ど)け。退かないと射殺(うちころ)すぞ」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉(からす)の啼(な)くような声を立てたかと思うと、まるで電気に打たれたように、

ピストルは手から落ちてしまいました。これには勇み立った遠藤も、さすがに胆(きも)をひしがれたのでしょう、ちょいとの間は不思議そうに、あたりを見廻していましたが、忽ち又勇気をとり直すと、

「魔法使め」と罵(ののし)りながら、虎(とら)のように婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躱(かわ)すが早いか、そこにあった箒(ほうき)をとって、又掴(つか)みかかろうとする遠藤の顔へ、床(ゆか)の上の五味(ごみ)を掃きかけました。すると、その五味が皆火花になって、眼といわず、口といわず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋風(つむじかぜ)に追われながら、転(ころ)げるように外へ逃げ出しました。

三

その夜(よ)の十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影(ほかげ)を口惜(くや)しそうに見つめていました。

「折角御嬢さんの在(あ)りかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴えようか？　いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香

港でもう懲り懲りしている。万一今度も逃げられたら、又探すのが一苦労だ。といってあの魔法使には、ピストルさえ役に立たないし、――」
遠藤がそんなことを考えていると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。
「おや、紙切れが落ちて来たが、――もしや御嬢さんの手紙じゃないか？」
こう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾い上げながらそっと隠した懐中電燈を出して、まん円な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違いない、消えそうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家（うち）ノオ婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私（わたくし）ノ体へ、『アグニ』トイウ印度ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ッテイル間中、死ンダヨウニナッテイルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ予言ヲスルノダソウデス。今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、気ガ遠クナッテシマウノデスガ、今夜ハソウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカッタ真似（まね）ヲシマス。ソウシテ

私ヲオ父様ノ所へ返サナイト『アグニ』ノ神ガオ婆サンノ命ヲトルト言ッテヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖（こわ）イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキット私ヲ返スダロウト思イマス。ドウカ明日（あした）ノ朝モウ一度、オ婆サンノ所へ来テ下サイ。コノ計略ノ外（ほか）ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サヨウナラ」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、余程運が好くないと、

――」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでしょう。今まで明るかった二階の窓は、急にまつ暗になってしまいました。と同時に不思議な香(こう)の匂(におい)が、町の敷石にも滲(し)みる程、どこからか静(しずか)に漂って来ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拡(ひろ)げながら、頻(しきり)に呪文(じゅもん)を

唱えていました。書物は香炉の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせているのです。

婆さんの前には心配そうな恵蓮が、――いや、支那服を着せられた妙子が、じっと椅子に坐っていました。さっき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはいったであろうか？　あの時往来にいた人影は、確に遠藤さんだと思ったが、もしや人違いではなかったであろうか？――そう思うと妙子は、いても立ってもいられないような気がして来ます。しかし今うっかりそんな気ぶりが、婆さんの眼にでも止まったが最後、この恐しい魔法使いの家から、逃げ出そうという計略は、

すぐに見破られてしまうでしょう。ですから妙子は一生懸命に、震える両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移ったように、見せかける時の近づくのを今か今かと待っていました。

　婆さんは呪文を唱えてしまうと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立ったまま、両手を左右に挙げて見せたり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするように、そっと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子を見ていたとすれば、それはきっと大きな蝙蝠（こうもり）か何かが、蒼白（あおじろ）い香炉

の火の光の中に、飛びまわってでもいるように見えたでしょう。

その内に妙子はいつものように、だんだん睡気がきざして来ました。が、ここで睡ってしまっては、折角の計略にかけることも、出来なくなってしまう道理です。そうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違いありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないように、御守りなすって下さいまし。その代り私はもう一度、たとい一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死んでもよろしゅうございます。日本の神々様、

どうかお婆さんを欺(だま)せるように、御力を御貸し下さいまし」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおいおいと、強くなって来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼(どら)でも鳴らすような、得体の知れない音楽の声が、かすかに伝わり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きっと聞える声なのです。

もうこうなってはいくら我慢しても、睡らずにいることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆さんの姿でさえ、気味の悪い夢が薄れるように、

見る見る消え失せてしまうのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし」

やがてあの魔法使いが、床の上にひれ伏したまま、嗄れた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないように、いつかもうぐっすり寝入っていました。

五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使う所は、誰の眼

にも触れないと、思っていたのに違いありません。しかし実際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴（かぎあな）から、覗（のぞ）いている男があったのです。それは一体誰でしょうか？——言うまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往来に立ったなり、夜明けを待とうかとも思いました。が、お嬢さんの身の上を思うと、どうしてもじっとしてはいられません。そこでとうとう盗人（ぬすびと）のように、そっと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さっきから透き見をしていたのです。

しかし透き見をすると言っても、何しろ鍵穴を覗く

のですから、蒼白い香炉の火の光を浴びた、死人のような妙子の顔が、やっと正面に見えるだけです。その外(ほか)は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははいりません。しかし嗄(しわが)れた婆さんの声は、手にとるようにはっきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし」

婆さんがこう言ったと思うと、息もしないように坐っていた妙子は、やはり眼をつぶったまま、突然口を利(き)き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のような少女とは思われない、荒々しい男の声なので

す。

「いや、おれはお前の願いなぞは聞かない。お前はおれの言いつけに背（そむ）いて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思っている。いや、その上に悪事の罰を下してやろうと思っている」

婆さんは呆気（あっけ）にとられたのでしょう。暫くは何とも答えずに、喘（あえ）ぐような声ばかり立てていました。が、妙子は婆さんに頓着（とんじゃく）せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐（あわ）れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかったら、明日（あす）とも言わず今夜の内

に、早速この女の子を返すが好い」

遠藤は鍵穴に眼を当てたまま、婆さんの答を待っていました。すると婆さんは驚きでもするかと思いの外、憎々しい笑い声を洩らしながら、急に妙子の前へ突っ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思っているのだえ。私はまだお前に欺される程、耄碌はしていない心算だよ。早速お前を父親へ返せ――警察の御役人じゃあるまいし、アグニの神がそんなことを御言いつけになってたまるものか」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶった妙子

の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿体なくもアグニの神の、声色を使っているのだろう」

さっきから容子を窺っていても、妙子が実際睡っていることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顕したかと思わず胸を躍らせました。が、妙子は相変らず目蓋一つ動かさず、嘲笑うように答えるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わか

らなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言いつけに背くか――」

婆さんはちょいとためらったようです。が、忽ち勇気をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟髪を摑んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思いに命をとってやるぞ」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟に身を起

すと、錠のかかった入口の戸を無理無体に明けようとしました。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が摺り剥けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわっと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたようです。遠藤は殆ど気違いのように、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、――戸はとうとう破れました。しかし肝腎（かんじん）の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えているばかり、人気（ひとけ）のないようにしんとしています。

遠藤はその光を便りに、怯（お）ず怯ずあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはいったのは、やはりじっと椅子にかけた、死人のような妙子です。それが何故（なぜ）か遠藤には、頭（かしら）に毫光（ごこう）でもかかっているように、厳（おごそ）かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん」

遠藤は椅子へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶったなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しっかりおしなさい。遠藤です」

妙子はやっと夢がさめたように、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「そうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げましょう」

妙子はまだ夢現（ゆめうつつ）のように、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったもの

だから、――堪忍して頂戴よ」
「計略が露顕したのは、あなたのせいじゃありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑った真似をやり了せたじゃありませんか？――そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい」
遠藤はもどかしそうに、椅子から妙子を抱き起しました。
「あら、嘘。私は眠ってしまったのですもの。どんなことを言ったか、知りはしないわ」
妙子は遠藤の胸に凭れながら、呟くようにこう言いました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくってよ」

「そんなことがあるものですか。私と一しょにいらっしゃい。今度しくじったら大変です」

「だってお婆さんがいるでしょう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさっきの通り、魔法の書物が開いてある、――その下へ仰向き(あおむ)に倒れているのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てたまま、血だまりの中に死んでいました。

「お婆さんはどうして？」
「死んでいます」
妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。
「私、ちっとも知らなかったわ。お婆さんは遠藤さんが――あなたが殺してしまったの？」
遠藤は婆さんの屍骸（しがい）から、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、――しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、――運命の力の不思議なことが、やっと遠藤にもわかったのは、この瞬間だったのです。

「私が殺したのじゃありません。あの婆さんを殺したのは今夜ここへ来たアグニの神です」

遠藤は妙子を抱えたまま、おごそかにこう囁きました。

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
１９６８（昭和43）年11月15日発行
１９８９（平成元）年５月30日46刷
入力：蔣龍
校正：noriko saito
２００５年1月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。